

岐阜同朋

ぎふどうぼう

- 被災者支援のつどい・宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要 参拝者の声
- 子ども御遠忌 ●コラムしょうしんげ
- 震災と御遠忌に思う ～共に生き合う社会を目指して～
- 得度式

2011.10 105



子ども御遠忌

2011.05.04

得度式



得度式とは、僧侶になるための儀式であります。真宗大谷派では、宗祖親鸞聖人が得度された年齢にちなんで9歳から受式できます。

得度式は、大谷派の本山、真宗本願寺(東本願寺)にて、毎月7日に執り行われます(8月は臨時式も含めて2回執行されます)。

受式にあたり、男性は剃髪し、女性

は髪を後ろで束ね、白い紙で巻きます。

式では、日程中に法名をいただき、仏弟子を名告りますが、それは、勝他(他に競り勝つこと)、名聞(名を上げ有名になること)、利養(経済的に恵まれた生活をしようとする事)という「三つの誓」を切って、求道者として生きることの決意を意味します。



お寺へ嫁ぎ、「そろそろ得度を」との軽い気持ちから挑んだ得度式。先立つて三月三十日に岐阜別院で行われた得度研修会の冒頭で、「得度＝僧侶になる」という言葉に、初めて事の重さを痛感しました。



そんな思いで迎えた七月七日の本山・得度式。白衣に浄衣姿で御影堂へと続く長い廊下を静かに進む間、自然とこれまでの人生

が思い出され、胸が熱くなりました。入堂し、厳かな灯明の下、剃刀と法名をいただき、儀式が無事終了。その頃には、まるで自分自身が生まれ変わったかのような不思議な思いに包まれました。



蒸し暑い雨の中、慣れない法衣に草履で大谷祖廟を参拝し、改めて僧侶となった事を自覚しました。

我が事のように準備を手伝ってくれた住職や家族、一緒にお経を練習してくれた友人達の温かい応援や支えに心から感謝し、得度を単なる形式だけに留めないよう、これからも教法と共に一歩一歩、歩んでいきたいと思えます。

第一組善林寺 奈波直子

編集後記

「恩送り」という言葉があります。同じような言葉に「恩返し」というのがあります。「恩返し」は、恩を受けた人に直接返す事ですが、「恩送り」は受けた恩をその人に返すのではなく、別の人に返す事を言います。私達は生きていく中で、気がつかないうちにいろいろな恩を受けています。しかしその受けた恩のすべてを直接その人に返していく事はできません。自分に受けた恩を別のの人に送るとその人がまた別のの人に送る。そうして「恩送り」が人の間に広く広がっていく...

2011年、大きな悲しみが渦巻きました。しかしそこには多くの「恩」が浮かび上がり、「恩送り」となって今まさに広がりを見せています。新しいスタートを切った「岐阜同朋」、様々な恩を頂きながら、また前に進みたいと思っています。

(羽部玲子)

被災者支援のつどい
宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要



参拝者の声

るようになってきました。

その間、お寺さんの関係者の方々に色々な話を聞き、今に至っておりますが、今やらなければならぬ事、また聞いておきたい事が沢山有り、気持ちばかりが前に出て、本当の自分がどこに居るのかわからなくなる時があり、気持ちの迷いもありました。そんな中、今回の御遠忌法要で京都へ行き本山へ入って思った最初の一言は、ただ「凄」その一言だけでした。修復された御影堂、そして全国各地から来られた同朋の方々の人数の多さには圧倒されました。

御遠忌法要にお参りし、いろいろな事を感じて帰ってきてこの頃思う事は、人は、気持ちの持ち方ひとつで、どんな方向にも進んで行く事ができる。人間は、感情と気持ちの生き物ではないかと思うよ

うになってきました。五月中旬、京都本山への御遠忌参拝の旅の中で出会った人達は、本当に自分と同じ様な事を思っておられる方々だったかなと思いつつも、人との出会いを大切にすることによって人の繋がりがより多くなり、そして人生の色々な勉強となり、人として成長できるのではないかと信じつつ、これからも今回の御縁を機に精進し物事に感謝をしていきたいと思っております。



日置英司

耳根清徹

五十年に一度の大切な御遠忌法要に、様々な思いの中で私も参勤させて頂きました。印象は震災を浄土の機縁とした、思いを馳せ、悲しみを刻み、共にする事を趣旨とする、同朋唱和を方法とするご法要でありました。ご法要は「宗祖としての親鸞聖人に遇う」という基本理念を確認する場所なのでしよう。

御堂は阿弥陀仏が説法する場、道場樹でしょう。仏前を莊嚴することは浄土莊嚴が現前することであり、如来の説法として我々に語りかけて来る世界である。即ち「一切莊嚴皆説法」である。大経、道場樹願成就文に浄土の音楽を説く前に「仏道を成るに至りて、耳根清徹にして苦患に遭わず」という言葉があります。「勤

行は聴聞なり」まず聞く、聞の声明ということをお明の先生からお聞きしております。すると儀式に参加するのですが、耳根清徹の聞くことを第一義とするのではないかと思います。そして「不犯威儀」「汝起更整衣服 合掌恭敬」の姿を取るのでしょうか。唱和以前に聞くという浄土の徳が御経に説かれてあるのです。

大谷派の声明作法は相対的で、御堂の大小、勤める者の人数、法要の軽重によって真・行・草の格の有る事をつたえています。これは残念ながら我々は威儀を直し、多少の緊張を以てしか、平生の意識では教えを真正面に受け止めることが出来ないからだと思えます。正しい莊嚴が私たちに「汝起更整衣服」を促し、私たちが莊嚴として包んでくれ

るのです。読経が先哲堅制不可疾読といわれる如く莊嚴、同じく損なつてはいけないでしょう。

上山信乗



前組長として臨んだ今回の御遠忌。

組長の時、幾年度も会議を重ね重ねて、たった2日であっけなく終了。

バス13台に分乗して頂いた御門徒の方々を無事、御遠忌にご案内出来たことで、まずは一安心。で、「貴方の御遠忌はどう??」と問われれば、「ん…役職

に始まり、役職に終わつた」といった感じ。

そういうえば、旗持ちばかりで親鸞聖人にお会いする暇がなかったことに気が付く。ただ、御遠忌事業の一環で継続された「親鸞聖人講座」で不心得な我が身に会うことは出来た。

小笠原宣



私は50年前、区(自治会)の集会に出席した時、区長さんから「来年5月、京都本山において、親鸞聖人七百回御遠忌法要が勤まるので、協力を願いた

い。」と依頼がありました。

それは寄付の事で、一戸当り9,800円では是非お願いしたいという話でした。その9,800円を寄付すると、本山へ納骨する3,800円の券が頂けて、その券は30年、50年過ぎてても有効という事、そのような依頼でした。

50年前、七百回忌法要にお参りした時、私は24歳で、私の住む那比(郡上市八幡町)からは30名程のお参りでした。その中でもう一人20代の人が見えましたが、その他の人は皆50代・60代の人ばかりで、私達の様な若い人は、京都本山まで行ってもほとんど見当たりませんでした。

当時、旅行に行くのは大変で、自宅から最寄の相生駅(鉄道)までは8.3kmあり、もちろん自動車などありませんでしたので、徒歩で2時間。駅に着く



とすぐ汽車が入り、その頃の越美南線は蒸気機関車で、白鳥方面から来た貨車は満員で、「君達は若いから、立って行ってくれ。」と言われて、美濃太田まで立ったまま。太田駅に着き、ここからは席もあると思つたら貨車はそのまま、機関車だけ替えて、客車は増えましたがそのまま続行。結局、私と武藤恒夫さん(28歳)は、京都まで立ちっ放しでどうとう相生駅から京都駅まで8時間以上立って行き、かなり疲れた覚えがあります。でも、今思うと良い思い出となつております。

京都へ着いて翌朝7時

頃、旅館を出て本山に着いたら、人、人、人で驚き、また本堂へは一度に一万八人入れられ、しかも正座で身動きも出来ず、各柱にはテレビが取り付けられており、郡上ではまだテレビがなかったのが本当に驚きました。

今回の七百五十回忌法要には家内と二人で御縁を頂きお参りでき、自分には本当に幸せです。私一代の内、親鸞聖人の七百回忌、七百五十回忌法要と二回も御縁を頂き、私にとつては最高の喜びと、深い深い御縁を頂いた事をつくづく思い、感無量でいっぱいです。

すべて御先祖様、皆様方に心より喜びと感謝の気持ちで、今振り返っております。誠にありがとうございます。

武藤 宮次郎

子ども御遠忌



私は、五十年に一度の子ども御遠忌という行事に参加しました。会場の東本願寺に行く、全国か

りと多彩で、初夏の少し汗ばむ陽気の中でしたが賑やかに時が流れました。

そんな中、ただはしゃぐのではなく、宗祖御遠忌であるという点、そして被災という事実を通して共に生きている私達であるということを確認しようという点を外さず行われていたことは特記しなければなりません。

「ナイトフェス」においては松本純氏(金沢教区)、「子ども御遠忌」では寺本温氏(長崎教区)から、「いのち」をテーマに子どもたちと共に考えながら、生きることを確かめようという法話をいただきました。子どもたちが仕立ての勤行もしっかり勤められていました。そしてエン



ら集まったたくさんの子もたちがいてびっくりしました。本堂でお勤めをしたり、境内の中を歩いて回っているキャラクターと写真撮影ができた、キャラクターショーを見ることができたりするなど、子どもが喜ぶことばかりでも楽しかったし、遊びのコーナーなどでスタッフの人たちが優しく対応してくださったので、嬉しかったです。会場は笑顔でいっぱいでした。

次に子ども御遠忌があるのは五十年後です。五十年後は、私はおばあちゃんになっていると思うので、その時は孫を連れて御遠忌に参加したいと思いました。とてもにぎやかで、楽しい行事に参加することができて、とても嬉しかったです。

八木彩香



ディングでは、子どもたちが被災者に向けて書いた五百通を超えるメッセージが、仙台教区仏教育年会の方々に渡されました。今回参加した子どもたちは、八百回御遠忌を担ってもらわなくてはならない同朋たちです。宗祖御在世以来、連綿と渡されてきた本願念仏の教えと出遇うのは、様々な生きる人と出遇い、その生き様から学ぶことなしにはあり得ません。

この御遠忌の体験が、子どもたちの心の何かに響いて残ってくれることをひそかに願ってやみません。

全ての関係者の皆さん、ありがとうございました。

梅溪祐慶



五月四日、真宗本廟で「子ども御遠忌」が開催され、私たち岐阜教区からも多くの子どもたち、親、スタッフの参加がありました。

私たちが家族は、「子ども御遠忌」の前夜の「ナイトフェスティバル」から参加をしました。とにかく宗祖御遠忌を子どもを対象に絞った形で開かれるのは、おそらく初めてということで、本山スタッフや関係者の方々が手探りながらも工夫を重ねられた様子



あかほんくん 鸞恩くん 蓮ちゃん

がよく見え、貴重な二日間でした。御遠忌子どもキャラクターである、鸞恩くん、蓮ちゃん、あかほんくんたちが司会者と共に盛り上げ役となって場を引っ張りながら終始進行していきます。

「ナイトフェス」での肝試しを兼ねての諸殿巡りやコンサート、「子ども御遠忌」での各教区や協賛団体によるブースでの催事やアニメ鑑賞など、子どもをあきさせないイベントが盛り沢山でした。特に午後から開かれた二十を超えるブースでは、劇や宝探し、三輪車レースや雪を運んでの遊び、物作りや学習ものあ

しょうしんげ

往還回向由他力

(往相 還相の二回向は 他力によるのです)

夏休み、「子ども奉仕団」の引率で上山した折、阿弥陀堂前の掲示板にJR東海のポスターが貼り付けてあるのを見かけました。

それは、父と手をつないだ男の子が御影堂門に立ち、御影堂を見つめながらじっと佇んでいるものでした。そのポスターには、「この町の過去は、君たちの未来のためにあるのだよ。」と

キャッチコピーが書かれています。

私なりに解釈すれば、「過去に生きてきた人たちがその歴史は、未来を生きてる君たちを支え励ましてくださる先達となり、現在に働いてくださっている」ということかと思いがら前を通り過ぎました。



仏法に置き換えれば、浄土を願う仏に成らんと歩む先達の相(往相)が、そのまま私たちに働きかけ私たちを導き(還相)、私たちの生き様そのものを変えていく(回向)ということなのでしょう。そして、それは、そのはたらきかけのすべてが阿弥陀如来の本願力によるということです。

だからこそ私たちは、生死を超えて還相の菩薩となっていかなければならないのです。

震災と御遠忌に思う

〜共に生き合う社会を目指して〜

「岐阜同朋」編集委員 尾畑英和

2011年は、我々宗門人とつて「宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要」が厳修される意味深い大切な年でした。大谷派宗門は、両堂御修復事業をはじめ、長い期間を費やし、法要に向けての周到な準備を進めてきました。真宗同朋会運動が叫ばれ、新宗憲のもとで厳修される初めての宗祖御遠忌としての意義は誠に大きなものがあります。しかしながら、その第一期法要が勤まる8日前の3月11日に東北・関東地方で未曾有の大震災が発生し、直後の大津波によって多くの命が奪われ、今もなお多くの方々が深い悲しみの中で苦難の生活を強いられています。重ねて福島原発の放射能の問題は深刻な事態に陥り、現在も収束、解決の糸口すら見出せていない状況です。正に



人知の闇は深く、自己を「義」とする人間の思かさには思い知らされるものがあります。

◆ そんな中で、宗派は直後に追った第一期法要を中止と決定し、法要は「被災者支援のつどい法要」と名を替え、趣旨・内容を変更してのお勤めとなりました。四月以降の第二期、第三期法要も第一期法要の思いを引き継ぎ、当初の内容を一部変更し、「東北地方太平洋沖地震被災者支援・宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要」として厳修されました。

◆ 期間中多くの方々が予定通りお勤めしたらどうか、第一期においても宗祖の御遠忌としてお勤めすべきでなかったか、等のご意見を伺いました。しかし宗門の判断は「中止」であり「変更」ではありません。このことは、我々宗門に関わる一人ひとりが、御遠忌法要を勤める意義を今一度問い直し、大震災とどう向きあっていくかを考えさせられる縁となりました。

◆ およそ仏教には二つの流れがあります。一つは「山の仏教」ともいわれ、社会と関わりを絶って真実を覚つていこうとする立場です。もう一つは、社会や人間と深く関わり、「世のいのりにこころをいれて」、共に歩み、社会の影響を受けながら真実の救いを求めていこうとする立場です。浄土真宗は後者であることは言うまでもないことです。それは、宗祖親鸞聖人が、苦難に満ちた生涯を生きたその歩みによって開顕された仏道であるからです。

◆ 聖人は幼い頃に父母と別れ、九歳で得度・出家なさった年に「養和の大飢饉」が起こります。京都では当時の人口の半数近くに当たる四万数千人が餓死、疫病で亡くなったと鴨長明の『方丈記』に記されています。町中は死体と死臭で溢れ、その夥しい数の亡骸は加茂川に捨てられ、川の水を堰き止めたといわれています。その光景を目の当たりにした九歳の少年は何を思い、何を感じたか。その後二十年、叡山にて修行・勉学の日々を送ります。しかし、どれだけ苦行を積んでも心が晴れやかで喜びに満たされることはありませんでした。やっと

自分の本心に歩むべき道が決し、よき人法然上人との出会いを喜び、念仏申す生活もつかの間、念仏教団の弾圧が「承元の法難」となり、共に念仏をいただきあった友を殺され、師と別れ、流罪、その後も数々の苦難、法難が、宗祖にふりかかります。老いた後も、関東教団では様々な問題が起こ

り、殊に「信心同一」論においては、その後の「善鸞義絶事件」へと発展していきます。九十歳で生涯を終えられるまで、常に「不安」を生き、数々の苦難の中に身をおきながらも、わが身にふりかかる現実を頷き、引き受けていかれた方、「本願に出会い、念仏申す身」を喜びの中で生きられた方、それが宗祖親鸞聖人です。だからこそ今回の法要は、震災で悲しみ苦しんでいる多くの人々を見過ごせない、どこまでも真摯に向き合い、寄り添っていく「支援」の法要だったのです。

◆ 「同一に念仏して別の道なきがゆえに、遠く通ずるに、それ四海の内みな兄弟とするなり。眷属無量なり。」（教行信証・証巻28）とあります。仏教の教えをいただき本願を信じ同一に念仏申すものは遠く孤独で悲しみの中にあつても心が通じ合つて一つになれる。他者と繋がりあつていることを実感できる。このことにより世界中で生きるすべての人々

は共に兄弟姉妹であり、家族である。私たちのいのちは他者のいのちと互いに深くつながりあい、関わりあい、支えあつていようというのです。親鸞聖人は、この教えに生き、共に励ましあう仲間を「御同朋」といだけられました。また、「一切の有情はみなもつて世々生々の父母兄弟なり。いずれもいずれも、この順次生に仏になりて、たすけそろうべきなり。」（歎異抄5条62）とおっしゃいます。「南無阿弥陀仏」の教えをいただくものは、ともに生まれかわり、死にかわり、過去から未来にいたる時間の中で共に仏になり助けあつていく身になるというのです。共に教えに生きたものたちは、往生の後、還相の菩薩となり、今現在を生きる私たちを支え、励ましてくださるのです。正に、時空を超えて「御同朋、御同行」の世界を示してください。大谷派宗憲の前文に「第一に、すべて宗門に属する者は、常に自信教人信の誠を尽くし、同朋社会の顕現に努める。」とあ

り、今回の法要はこの精神に沿う御遠忌法要でなければならなかったと言えましよう。

◆ 「観仏本願力 遇無空過者 能令速満足 功德大宝海」（浄土論141・519・543）、大切な願いに気付かず、「空過」していく私たちの生き方を根本から問い返させてくださるご本願の有難さ、疑惑の人も、罪悪の人も、煩惱の人も、大きな掌の中で救いとして本願の大海の「一味」としてくださるご本願のかたじけなさには報恩の念を抱かずにはおられません。宗祖の御遠忌法要をお勤めする意義は明らかです。それは、イベントでも祭りでもありません。共に「御同朋・御同行」の世界をいただきなおす法縁です。だからこそ、震災、津波、原発によって引き起こされた多くの人々のはかり知れない苦しみ、悲しみを前にして第一期法要が中止となり、二期、三期もその願いを引き継ぎお勤め

のつどい法要は、世間がいう自粛でもなく、鎮魂・追悼でもありません。「支援」なのです。私たちは、共に生き合う同朋として支援する。そのことを通して支えられていた自分に気付いていく。励まし、勇気づけたいと願う中で、励まされ、勇気づけられていく。そんな世界があることを「南無阿弥陀仏」によって教えられていくのです。

◆ 五十年後には、私たちの子や孫たちの世代の人々によって宗祖八百回御遠忌法要が勤まることでしょう。その時まで、更にその後々まで、今回の法要の全体が語り継がれていくでしょう。震災をどう受け止め、「宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要」をどうお勤めしたかを宗門に関わる一人ひとりが総括し、次の世代に示していくことが願われています。なぜなら、そうすることが、正に宗祖親鸞聖人の「本願念仏の教え」に出遇っていくことだからです。